

# 電話の長ダルのギンパン

もし、もし、お元氣? ことしもよろしくね。まあ一年の経つのははやくって、またひとつ年輪を刻んでしまいましたわねえ。

え? 何か面白い話はないかって? 年の初めから退屈しているようじゃあ、あなた、今年もメジャーにはなれそうもないわねえ。そうですねえ、今一番面白いのはアップミドルのハイスクールパワーですよ。彼らって東京の異邦人ってカンジで、次なる日本を支える資質を持っている。もう私らの高校生活とは雲泥の差でして、その自由かつリッチさ加減には、目くじらを立てるどころか、うらやましいのを通り越し、頼もしささえ感じてしまう。

言わば、三田明の「美しい十代」ではなく、さしずめ、ボウイ・ジョージなどがビッターリ、まさしく「美しい十代」。雑誌の「オリーブ」が描く世界ですよ。人みな、中流意識を持つ中で、彼らは本家本元の中流のお坊ちゃま、お嬢ちゃま。なんたって、東京の私立高校ってのには、粒の揃った裕福な家庭の息子、子女が来ているわけで、無理して背伸びして親が貯金したいで、何とか上京してもぐり込んで来るようなやからが混る大学とは、おのずと一線を画しているわけです。クオリティ

イが高い、ひとつのソサエティなんです。ぜいたくなものを食べて、ぜいたくな暮らしをし、ぜいたくに遊んでいるから、スクスクと育って、みんなスタイルが良くなって、容姿は人並み以上。性格も明るいいし、なにしろコンプレックスがありません。ほとんどの家庭が資産家だったり、ビルをいくつも持っているような自営業だったりするもんで、その後を継げばよいこともあり、ガツガツと将来の就職のために、

の打ち合わせもしようぜ」週末には六本木のディスコ「ジョル」を借り切ったの。東京地区・私立高校交流ダンスパーティーが開かれ、思う存分おしゃべりして集まるってわけ。当然のこと、田中康夫先生が舌なめずりしそうな、私学女子高校生の一流どころも大集合ってわけ。

A君は、こういう時に着る、「ムッシュニコル」のスーツが引き立つような、映画俳優も顔負けのボディを作るため、週に一回はトレーニングジムへ出かけ、ボク

この感覚って、もはや、日本の感覚ではない。といって、現在の自分が呪わしい。「公園通りを歩いていて声をかけて来る雑誌の取材、『アンアン』『オリーブ』ならいいけど『ギャルス・シティ』じゃねえ」

## 東京のニューハーフ「オリーブ」世代をよいしょよしちゃって、注目です。

ガリ勉することもない。ラグビー部の練習を終え、家に着いたら軽くシャワー。ボウイ・ジョージの曲を聞きながら、モノトーンで統一したハイテック感覚の部屋へ。もち、お勉強は塾なんかに行く必要もないから、英会話の家庭教師と余裕の時間を持ちながら、そのうちガールフレンドからの電話。おーっと、それもステディのほうの。「なーに、明日、原宿に行こうって。オッケー。それなら出来たばかりの『イクラブ』がいいよ。週末のパーティー

シグなんかもやって、カラダには責任を持っているんです。ですから、毎月のおこづかい、下手なサラリーマンよかよっぽど多いってわけで「スネっかじりが」と腹を立てるムキも多いんでしょうが、私はこのへんにパワーを感じ、許してしま。私たちがの世代であつたら、スネっかじりってことに、もうコンプレックスを持つちゃって、上手にお金を遣えなかつたり、クラクなくなつたりしたと思う。ましてや、ホテル代なんかは親が汗水たらして手にした

お金を遣うなんて、神様のパチがあたるだろうなんて、卑屈になるのがフツーでした。その点彼らは、明るくいさぎよく、スネをかじるのです。食べることも、遊ぶことも、装うことも「大人になるまで我慢して」ということがない。セックスもです。だけど、決して、乱れているってわけじゃなく、好きだと思えば、その気持に素直に屈折せず臆せず……です。

「ぜいたくは敵だ」をモットーに欧米に追いつけ追い越せて頑張ってきた日本は、今後は「ぜいたくは素敵だ」と無理なく思える人々に支えられるはずで、ぜいたくをぜいたくだと未だに感じてしまっているのは、まだまだ「敵だ」と思っているの、まだまだ「敵だ」と思っているの、昭和六〇年代の新日本人じゃないかなあ。どお、もしもし、聞いてるう?

「公園通りを歩いていて声をかけて来る雑誌の取材、『アンアン』『オリーブ』ならいいけど『ギャルス・シティ』じゃねえ」

「一八歳になったらすぐに運転免許を取るんだ。車はベンツがいいなあ」

「英会話の家庭教師が小林麻美みたいなヒトだったら、最高。絶対アッチのお相手してもらっちゃう」

タカノテルミ(出版共著者)